

保育・教育の根底にある超越的視座

大 城 邦 義

はじめに

大谷大学の根源に^{かく}蔵されている「浄土の真宗」が、私の「人間学」の根底であり、「私」の人間学を成り立たしめているものである。それが本研究発表のテーマとなった。すなわち、私の「人間学」がこのテーマを呼び起こしたのである。私にこれをテーマとせよと言わしめているのが「大谷大学の人間学」である。その意味では、私はその「大谷大学の人間学」に^{つか}事える者であり、奉ずる者である。人は真に奉事するものを^も有つことによって、それに支えられ、真に立つべきところに立つことができる。立つ姿勢をたまわり、確立することができる。「学」は人を超えたものであり、人はその「学」に真に仕えることによって、生きる姿勢（道）をたまわる。「大谷大学の人間学」は、私を「人間」として成り立たしめている「学」であり、私を私たらしめ、生かしている「学」である。それが、私が出会った「真宗学」・「浄土真宗の教学」である。

故に私の根本関心は「宗教とは何か」という一点を明らかにしたいということにある。その意味で、この発表依頼を受けた時、私のなかですぐに立ち上がってきたテーマは、「宗教とは何か—善導独明仏正意—」・「宗教の独立—善導独明仏正意—」ということであった。「宗教とは何か」すなわち「宗教の独立とは何か」。それは「宗教心とは何か」ということであり、すなわち「人間とは何か」という根本問題である。しかし、私はそこで退

一歩し、私自身が身を置いている場で受け止めなおしたとき、立ち上がってきたテーマが「保育・教育の根底にある超越的視座」である。保育・教育において、この一点が現代最も問われていることであり、その一点が私を動かしているということが見えたのである。思えば、幼児教育保育科において倉橋惣三と出会って以来、久しく温め続けてきたことがこのテーマであると言える。このテーマの中に脈動し胎動している事態を明るみに出していく、それが私の保育・教育における根本関心なのである。私はこの一点を明らかにすべく問われているのである。人間が混迷している現代、「人間であることの原点」が最も喫緊のこととして根本で問われているということである。

倉橋惣三 (1882~1955)

倉橋は、大正から昭和にかけて、日本の幼児教育界の理論的指導者として、児童中心の進歩的な保育を提唱した人である。倉橋は、第一高等学校を経て東京帝国大学文学部哲学科(心理学)を卒業後、明治43年(1910)東京女子師範学校に着任し、大正6年(1917)同校教授となり、同時に附属幼稚園主事となって、昭和24年(1949)同校を退官するまで、日本の幼児教育の発展のために貢献した。

倉橋は、幼児教育の第一義は幼児生活の価値を知ること、幼児教育に関するすべての問題は、理論的にも実際的にも、この第一義から派生する、としている。幼児生活の価値を認めるからこそ、幼児の生活を保障することの必要性を提唱したのである。それは、教育を生活に近づけるという生活の教育化に発展していった。幼児の生活それ自身が自己充実の大きな力をもっているゆえに、幼児の生活を「さながら」にしておくことが大切であり、幼児の自発生活を尊重して、教育を、「生活を生活で生活へ」と導いていくことが重要であるとしたのである。それで倉橋の保育法は「誘導保育法」と言われている。ⁱ

生活を生活で生活へ

倉橋は、幼児の生活を非常に重視した。幼児の「いきいきしさ」を大切にすゆえに、どこまでも幼児の方へ赴き²即こうとするこまやかさを大切にした。故に、幼児をまず生活させる場として、幼稚園を本当に生かすべく、どこまでも実際を実際に即して考えつつ行い、行いつつ考え、深めていった。それで、「教育の対象」である子どもに忠実であること、どこまでも子どもの方へ降りていく姿勢を大切にしたのである。それは、決して「教育の目的」を失うことではなかった。子どもの自然な「生活形態」を重視し尊重して、いわゆる教育のもつ臭味を抜いて、子どもの生活へ教育を織り込み溶かしていこうと「生活を生活で生活へ」と唱えながら、ⁱⁱ園の保育のあり方を求めていったのである。

その倉橋の根本にあるものを、私は次の言葉に見る。

「自ら育つものを育てせようとする心。それが育ての心である。世にこんな楽しい心があるうか。それは明るい世界である。温かい世界である。育つものと育てるものとが、互いの結びつきに於て相楽しんでいる心である。」

育ての心。そこには何の強要もない。無理もない。育つものの^{おお}偉きな力を信頼し、敬重して、その発達の途に遵うて発達を遂げしめようとする。役目でもなく、義務でもなく、誰の心にも動く真情である。

しかも、この真情が最も深く動くのは親である。次いで幼き子等の教育者である。そこには抱くわが子の成育がある。日々に相触るる子等の生活がある。斯うも自ら育とうとするものを前にして、育てずしてはいられなくなる心、それが親と教育者の最も貴い育ての心である。

それにしても育ての心は相手を育てるばかりではない。それによって自分も育てられてゆくのである。我が子を育てて自ら育つ親、子等の心を育てて自らの心も育つ教育者。育ての心は子どものためばかりではない。親と教育者とを育てる心である。」ⁱⁱⁱ

同書第3版(昭和20年10月)の序文には、

「国敗れて、いちばん気の毒なのは子どもである。がまた、いちばん希望をもたせるものも子どもである。濟まんねといった心苦しさと、たのみますよといった頼もしさと、それが一つにこみ上げて来る心もちで、じっと見まもりもし、抱きあげたくもなる。

悲しみも、憂いもまだ知らない。しかも、彼等の成長がだんだんに彼等にわからせてゆくものを、彼等はどう受け取り、どう担ってゆくだろうか。思えば、彼等の父母も祖先も、仮にも経験しなかった苦難の成長である。しかし、わたしたちは忘れてはならぬ。如何に苦難でも成長は成長である。否むしろ、苦難の裡にこそその逞しさを發揮せずにはいないのが成長である。わたしたちは、この成長の真義を聊かも疑ってはならぬ。なおまた、苦難とはいいいながら、再生日本の新しい生活には、子どもらの真実の進展のために、新しい道程が企画せられている筈である。わたしたちおとながどんな急転回に混迷することであろうとも、幼きものの行路を塞ぐような荒徑にまかせておいてはならぬ。わたしたちは決してそれを怠ってはならない。

教育は育つものに対する信仰である。信仰は如何なる時にも世界を明るくし、励まし活気づける。わたしたちが此の今日、子どもらと共に笑い、遊び得るのも、此の信仰が与える光明によってである。」^{iv}

倉橋の根本にある「子どもを“共に生きる人間”として」^v見つけている眼差しがはっきりうかがえる。倉橋には存在の根本からの「共生」という実存感覚があった。そこに私は「保育・教育の根柢にある超絶的視座」を見るのである。倉橋の中には超絶的普遍的な眼差しが現成している。そこから「生活を生活で生活へ」という言葉は生まれて来ているのである。

内 観

「共生」ということは、今日誰でもどこでも言っている。しかし、真にその「共」という実感^もと眼差しを有ち、「共」を現成して生きている人は稀有

である。「共」とは前述のとおりであるが、その「共」が現成するに至る道は如何なることなのか。それは如何なる境界きょうがいを開くのか。

そこに必然するのが「内観」という事態である。「内観」とは一般に、自分の心の内(中)を見る introspection (内省・自己反省)という内向的な在り方を言う。仏教においては自己の内に真如実相を観ずることである。そこで自己に現成する三昧という事態も内に向かうことによって、身心に開かれる境界である。その意味では introspection という在り方も、仏教における内観も、人間が真実なる実相に眼を開き、人間が人間であることを成就するために重要な位置をもっている。しかし、それは「生活を生活で生活へ」という「共」の境界を生きている倉橋における「内観」という事態においては、その入り口であり、途上のことである。introspection も、仏教一般における内観も、実はそこからさらなる先への展開があり、それこそが本当の超越的視座における内観の境界なのである。それはいみじくも清澤満之が明らかにし、生きた境界と等質である。^{vi}

倉橋は子どもを鏡として限りなく内観している。否、子どものみならず、まわりのすべての人ともものを鏡として内観している。正に子どもの「生活」を内観し、現実世界を内観している。そこには絶対的とも言える謙虚さがある。それが倉橋の「共」の実存感覚であり、姿勢である。倉橋は言う。

「子供の弱点をあわれむ心から子供の愛憐が生れ、子供の長所を賛美する心から子供讃歌が生れる。注文でなく、要求でなく、教化の心でもなく、讚美である。讚嘆である。またしても起る小さきものへのあわれみの心を越え、さげすみをすててその小ささよりも、偉いさに驚き嘆ずる心である。それも、浅い心からの驚きではなく、功利打算の値ぶみからでなく、いと深きところの嘆美であり、詠嘆である。(中略) 小さいものうちに、偉大と美とを見出して、驚き嘆ずる心である。大の発見から起る大への仰望である。より大への志望である。志望というよりも激勸である。(中略) 自らあわれむ。子供讃歌の心の少なきを、誠に天下の子

供に対して、はずかしさに耐えない。』^{vii}

「子供を外に眺めるのに対して、内に感ずるようになったとでもいおうか。むずかしくいえば、認識の対象から体験の実存になってきたといおうか。いずれにせよ、対象といったような客観的なものでなく、わがもの、わが内なるもの、つまりはわれそのもの—われの子供か、子供のわれか—として渾一的なものである。その渾一性は、研究対象、教育対象といった、(愛の対象という場合でさえも) 近いなりにも距りをもつものではない。一体一如そのものである。』^{viii}

開 展

「我々は通常「もの」自體をその周辺から、その外を繞りつつ見てゐるのである。そこでは「もの」はその自體を開示してゐない。』^{ix}といわれるとおり、我々は普通「もの」を外観している。しかし、その「外観」の眼、すなわち外(他)に向いている眼が、内(自)に向かう。そこにいわゆる「内観 introspection」が始まる。それがさらに進むと、ただひたすら内(自)のみを観るようになる。それがさらに進むと、外(他)を内(自)に観るようになる。それがさらに進んで外(他)が内(自)に見えてくるようになる。「観」から「見」(=「現」)への転成である。「もの」自體は我々がその自體へ、すなはち周辺から中心へ、躍入するといふことによる以外には開示され得ない。』^xといわれるとおり、そこに「躍入」すなわち「転入」がある。そこにおいて外(他)は内(自)であり、内(自)は外(他)である。内外一如・自他一如という境界が開かれるのである。清沢の言う「主客超絶」^{xi}の場の開展であり、そこには「万物一体」の境界が開かれている。自他の差別が泯亡し一如の中で真実相を知るのである。ものそのものとなつてもものを知るということである。そこでは自分(自己執着・自己愛)が離れられている。当然、自分を客観化し、客体化できている。それが真に人間が開かれるということである。(introspection という在り方は、自分が離れられていない。)

空の場

西谷啓治は言っている。

「もの」自身のもとに有る「もの」には裏も表もない。それはただ端的にそれ自身であり、それ自體として有るのみである。もちろん、さういふ有り方を自主的といっても、普通に自己意識的な「自我」についていわれるような「主體的」といふ意味ではない。「もの」を擬人的に考へてゐるのではない。「もの」自體といはれる限り實體の概念に通ずる性格を含み、自主的といひ得る限り主體の概念に通ずる性格を含みながら、自體は「實體」でもなく「主體」でもない。今まで日常人々が問題にしなかつたのみならず、哲学すらその存在論に於て考察に上さなかつたやうな、全く別の存在概念である。併し例へば芭蕉は、「松のことは松にならへ、竹のことは竹にならへ」と言つてゐる。それは単に松を仔細に観察せよといふ程度の意味ではない。まして松を科学的に研究せよといふやうなことでは全然ない。むしろ、松が松自身であり竹が竹自身であるところの、それぞれの自體的な有り方に自分自身もなつて、そのところで松を見、竹を見よといふことである。それらが如實に現成してゐるその次元へ参入する、といふことを要求してゐるのである。或るものに「ならふ」とは、それと本質的に等しい有り方に立たうと努めるといふことに外ならない。さういふことの可能になるのが空の場である。』ⁱⁱⁱ

倉橋にもこの西谷の言う「空の場」が開かれていた。即ち「生活を生活で生活へ」と唱えながら幼児の教育の真の在り方を探求し続けた倉橋は、「自己が空であるといふよりも、むしろ空が自己であるといふこと、「もの」が空であるといふよりも、空が「もの」である」ⁱⁱⁱⁱという「空の場」にいたのである。それが、他を見る自の立場を超えた境界における、リアリゼーションを生きている「生活者」の在り方である。

倉橋はそこにおいて「共」を生きていたのである。「生活を生活で生活へ」、それは「子どもとの生活を子どもとの生活で子どもとの生活へ」と

いうことであるが、「子ども」という小さなもの、弱いものの中に、「ほんたうのさいはひ」「ほんたうのほんたうの」ものを実感し、「ほんたうのほんたうの神さま」(宮沢賢治)^{xiv}を倉橋は見つめていたのである。すなわち、最も平凡な日常生活の場に「ほんたうのほんたうの神さま」はいると。さすれば「生活を生活で生活へ」というところには、三輪清浄^{xv}なる「生活」が見つめられていたのであり、「子どもの生活を、子どもの生活で、ほんたうの生活へ」という、真に人間であること、人間としてあるべき原点を「子ども」の中に倉橋は見えていたのである。それは子どもを全肯定したり、子どもにロマンをもったりすることではなく、子どもと共なる生活に、本来の真実の人間性を見ていたのである。

「神的な超越性は、外的な絶対者としてではなく、自己自身の場所で、しかも全く逆説的な仕方を実現するのだ」^{xvi}

倉橋は「子ども」という未発達・未成熟の存在を丸ごと受け入れながら、子どもと「共に生きる」ものとして、どこまでも人間の善性を引き出し育てていこうとした、天性の教育者であった。真に子どもに学び続けた真実の人であった。

私は倉橋惣三に「保育・教育の根底にある超越的視座」を見るものである。

注

- i 『保育用語辞典』(ミネルヴァ書房)『倉橋惣三選集』第1巻「幼稚園真諦」(フレーベル館)参照。下線・大城
- ii 『倉橋惣三選集』第1巻「幼稚園真諦」23頁(フレーベル館)
- iii 『倉橋惣三選集』第3巻12頁『育ての心』序、昭和11年12月(フレーベル館)下線・大城
- iv 前掲書7頁 下線・大城
- v 『子どもに生きた人・倉橋惣三』森上史朗(フレーベル館)
- vi 『清澤満之全集』第6巻「心機的发展」「智慧円満は我等の理想なり」(岩波書店)
- vii 『倉橋惣三選集』第1巻125頁 中略及び下線・大城
- viii 前掲書196頁 下線・大城

- ix 『西谷啓治著作集』第10巻147頁(創文社)下線・大城
- x 前掲書 同頁
- xi 『清澤満之全集』第6巻「心機の発展」(岩波書店)
- xii 『西谷啓治著作集』第10巻145頁(創文社)下線・大城
- xiii 前掲書156頁
- xiv 『近代日本思想の肖像』「プロカニロ博士の消滅一賢治・大乘仏教・ファシズム」大澤真幸(講談社学術文庫)207頁
- xv 施者・施物・受者。『聞名懺偈』新居貞輔(非売品)平成7年1月1日発行、参照。
- xvi 前掲書『近代日本思想の肖像』207頁
(大谷大学准教授大谷大学における人間学としての仏教・教育・保育)

〈キーワード〉倉橋惣三、内観、生活を生活で生活へ

〔編集委員会付記〕

この他の発表題目及び発表者は以下のとおりである。

プロレタリア文化運動と「大陸」

喜多恵美子 大谷大学准教授

『平家物語』先帝入水叙述の検討——二位尼時子の言動の文脈——

池田敬子 大谷大学教授

以上の発表内容は次号以降の『大谷学報』に論文として掲載予定である。

